

保田正毅先生を送る

コミュニティ政策学部教授

学部長 山崎 丈夫

保田先生は、当学部の第2代学部長（平成14年～15年度）を務められました。先生が学部長時代に示された学部運営の方針は、常に、「学部教育の理念に生命を吹き込み、学生を主役とした教育実践を創り出せるか否か」ということに重点が置かれていました。その基調は、学生一人ひとりに関心を寄せ、社会との関係で学生を育てていくということでした。このような学部のあり方に対する考え方は、先生の青少年教育や生涯学習に関するご専門に由来するものであると思います。

先生のご専門は、青少年教育、社会教育、生涯教育です。先生は、学部開設（平成10年）と同時に岩手大学から赴任されました。その折、研究活動の概要と今後の方向について次のように述べられています。「今日、生涯学習という観点から、地域社会の教育的再編が強く求められています。それは、これまで行われてきた学校教育偏重主義の弊害を取り払い、学校・家庭・地域（職場）の結びつきを求める新たな教育システムの構築をめざすものです。こうした教育政策の動向の中で、＜地域の教育力＞を創出する取り組みが極めて重要になってきました。」（『専任教員プロフィール』）。

このような研究上の問題意識に基づいて、以後、地域における学習・文化・スポーツ活動やボランティア活動などの学校外活動、住民の学習の拠点としての社会教育施設の活動について、コミュニティ形成との関係を重視して研究してこられました。以前、先生の研究について、人伝えにこのような話しをお聞きしたことがあります。「最初は、専門として東ドイツの教育を勉強したが、ベルリンの壁が崩れて東西ドイツが統一したために、ドイツ留学で集めた書籍が無駄になってしまった」というようなことです。いろいろなご経験をなさりながら、ドイツの青少年教育研究をはじめ、上記のような研究内容を重点に深めてこられたのです。

当学部での教育・学生指導上で書いておかなければならないことは、他の教員が羨むほどに、“女子学生に圧倒的な人気があった”ということです。研究室には、いつも学生が集まり、研究室前の談話室では、学生が卒業研究の紙芝居を制作している姿をみかけました。そして、制作した紙芝居を持っては、地域の幼稚園、公民館などに運営実習の一環として出かけておられました。今、このような表現スタイルでの学生教育をみるのが少なくなったことは残念でなりません。

先生が学部長をされていた間、私は学生委員長でした。学部運営委員会の一員として、学部運営の一端を共に担わせていただきました。先生は、学部長2年目に当たる2003（平

成15年)年度の学部事業報告書『あゆみと展望』の「はじめに」の中で、その当時をこのように総括しておられます。「教務関係では、新新カリキュラムの適用により、1年次から4年次までの少人数のゼミ体制が整ったこと、学生関係では、学生会主催・学生委員会後援の下での新入生歓迎スポーツ行事が举行されたこと、就職関係では、1・2年次の就職指導のための手引きがつけられたこと、入試関係では、アドミッション・ポリシーを明確に打ち出した『ナビゲートタイプ・AO入試』を導入したこと、学生による授業評価を本格的に実施し、それをふまえた授業改善レポートを作成・公開したこと、第1回海外研修『フランスのコミュニティを知る』を実施したこと」などを挙げておられます。

今から見ますと、これらのことは、現在の学部運営の基盤を形づくるものでした。先生は、このような取り組みの先頭に立ってこられました。今日の学部は、このような基盤固めの上に成り立ち、教職員の努力によって、しっかりと路線を継承しながら新たな発展を目指そうとしていると思います。

さらに、この時期は、学生募集でも大変困難な状況に陥りましたが、加えて、教員集団のあり方をめぐっても苦勞の多い時期でした。所属教員が、就業規則に抵触するか否かについて問われる問題が起こった際は、これを教授会の自治に関わるものとして捉えて、適切な対応をされました。運営委員会を連日開いて、この問題を整理しながら対応に当たった当時が思い出されます。緊迫した状況のなかで、真っ直ぐに問題を捉えて解決への道を模索されていた先生の姿からは、古武士のごとき落ち着きと氣迫を感じました。学生に「失敗をおそれず、いろいろなことにチャレンジしていこう」という呼びかけを常にされている先生の信念を見た思いでした。このような経験は、先生の後を及ばずながらも担って学部運営をしていく上で、実に多くのことを学ばせていただく機会がありました。

一方で、傍目にも大変苦勞されておられることが感ぜられるときに、「気分転換に、野菜作りをしています」ということで、収穫された冬瓜などをわざわざ大学へ運んでいただき、何度もお裾分けに預かりました。このところ、農作業にも一段と力が入っておられる様子ですが、今後とも、健康の基としてご精出下さい。

先生には、幸い、今後も非常勤講師として学部教育にご尽力いただきます。引き続き学生への情熱あふれるご指導と、学部発展に向けたご鞭撻を賜りますようお願いいたします。先生のご健康とご多幸を心から祈念いたしまして送る言葉とさせていただきます。